

高尾山報

令和4年1月号



初詣 日本遺産の高尾山

明けましておめでとうございます



執事
犬山 秀康



執事長
菅谷 秀文



前貫首
大山 隆玄



用度部長
山本 憲佳



庶務部長
藤田 健太郎



総務
原田 明仁



信徒部長
深田 洋平



修験部長
中原 秀英



用度課長
大山 文武



参事
佐藤 伸二



教務課長
桑名 善光



法務課長
上村 公昭



参事
堀江 承豊

交通安全祈禱殿
高尾山修験道

蛇滝水行道場
高尾山報編集室

琵琶滝水行道場
山内職員一同

年頭所感

靈氣満山

大本山高尾山薬王院 中興第三十三世 貫首 佐藤 秀仁



明けましておめでとうございます。
ご信徒の皆様には穏やかな新春をお迎えなされました事と謹んでお慶び申し上げます。
令和四年元旦に当たり御本尊飯縄大権現様御宝前に於きまして世界平和、国土安穩を心より御祈念申し上げた次第です。
さて、一昨年の十二月一日に高尾山主の大任を仰せつかり、これまで御先代の意を持して高尾山飯縄信仰宣揚せしむる事への重責を痛感

致しつつ精進の日々でありました。
この間、全国十方有縁のご信徒各位からお寄せ賜る御厚情は勿論、法縁諸大徳並びに共に山野を駆けた多くの験友より賜りました御法助に対し唯々感謝の念に堪えぬところであります。
顧みまするに高尾山は、令和二年六月に「靈氣満山高尾山」と称し日本遺産の認定を受けました。これは、高尾山を取り巻く歴史や文化を過去から現在そして未来へと紡いでいくという大切な取り

組みであります。
この靈氣満山という言葉は、在りし日の先々代御貫首山本秀順大僧正が「朝夕のお山に霧が立ち込める様子を神仏のお力が目に見えて顕れる事。即ち神仏のお力に満ちたお山の事を靈氣満山と呼ぶ。」と、若き日の大山前御貫首様に対しお示しなされた尊い教えであります。
この事を験者の端くれである小衾なりに解釈しますれば、靈氣満山とは生命の力に満ちたお山であるという意味が込められていると思っております。
世の中が如何に進歩し発展を遂げたに致しましても唯一変わらぬ物と致しまして大自然の大いなる営みが有ります。
高尾山内では、小さな草も木も鳥も虫も樹齢数百年の大杉も与えられた生命をそれぞれ精一杯全うしているのです。普段生活している場所とは異なる厳かなお山の空気は、

一生懸命健気に生きる様々な生命力の顕れと申せるのであります。
御信徒の皆様にはご来山の折、是非とも大杉を見上げながら深呼吸して頂き、ご自身の呼吸に於いて直接、その生きる力を心身へと存分に取り込んで頂きたいと存じます。
必ずや人生を歩む勇氣や自信が新鮮となり、お山をお下りになられた皆様のご家庭は自ずと円満に、事業ならば益々の繁栄に、それぞれの人生や生活の隅々に生きる力が及ぶ事と存じます。
高尾山が靈山たる所以はそこにあるという事を広く多くの方にお知らせ出来るように全力を尽くし精進して参る覚悟であります。
茲に年頭に際し、御本尊飯縄大権現様のご利益に浴せられ本年も愈々お健やかにお過ごし頂けます様ご祈念申し上げます。年頭の御挨拶と致します。

法の水茎

大正大学講師 高橋秀城

(115)

正月立つ

春の初めに

かくしつづ

相し笑みてば

時じけめやも

（『万葉集』大伴家持）
正月を迎える春の初めに、このようにして、お互いに笑顔をお互いの時節外れなのかなあ、いや、いつでも喜ばしいよ、令和の御代も四年目を迎えました。新しい年の始まりを祝い、夢と希望を胸に抱きながら、この一年の健康と幸せを祈ります。

正月は「睦月」とも呼ばれます。一説では、新年を迎えて多くの人が行き来し、仲睦まじく語り合うところから名づけられたとか。ここ数年は途絶えがちになっていた家族や仲間との団欒が、以前のようににぎやかに復

活することを願います。

冒頭の「正月立つ」の歌では、新春に集った人々がお互いに笑顔をお互いに福来たる」の諺のように、和やかな人の近くには、自ずから幸福が舞い込んでくるものです。何かと憂いの多い時代ではあります、少しでも心穏やかな微笑みの時を大切にできればと思います。温かな眼差しや笑顔は、きつと周りにも良い影響を及ぼすでしょう。

仏教に「眼施」という教えがあります。これは、「無財の七施」という七つ布施の第一番目に挙げられていたものです。「布施」と聞くと、お寺や神社などへの金銭や物品の寄付を想像されるかもしれませんが、富や財産を使

わなくても、誰もが人々に喜びを与えることのできる実践法です。他者への布施行は、廻りめぐって自分自身にも大きな果報（良い報い）をもたらします。

「眼施」については、「無財の七施」を説く『雑宝蔵経』というお経に、「常に好眼をもって父母・師長・沙門・婆羅門を見、悪眼をもつて見ず。これを名付けて眼施となす」と見えます。「好眼」の「好」には、「美しい」の他にも「親しい」「睦まじい」という意味があることから、「好眼」は「相手を分け隔てなく思いやりの心で見つめる眼差し」と言えるでしょう。

一方、「好眼」の対になる「悪眼」は「険しい、憎しみの眼」を表します。慈眼等しく見れば、怨憎会の苦もなし。『栄花物語』（慈愛に満ちた優しい眼で平等に見れば、怨み憎む人や事物に出会う苦しみもない）



笑顔多い高尾山に戻ることを願っております

と説かれるように、「苦」を生み出す「悪眼」を離れ、慈悲の「好眼」を身につけることが、幸せへの第一歩となります。

ところで、インド北部のヒマラヤ山脈には「俱那羅鳥」（鳩那羅（クナラ）鳥）という鳥がいるそうです。美しい眼を持ち、「好眼」と訳される野鳥です。この俱那羅鳥をめぐっては、古代インドの阿育王（アシヨールカ王）の子息である王子が、俱那羅鳥のように澄み

渡つた瞳をしていたために「俱那羅太子」と名づけられたと伝わっています（『三國伝記』）。

この俱那羅太子の父、阿育王をめぐって、次のような話が残されています。阿育王は深く仏法に帰依していましたが、多くの僧侶や修行者を宮中に招いては供養をしていました。阿育王には弟がいました。弟は仏法を信じず、僧が供養を受けるのを憎んでいました。

晋山式のお知らせ

令和四年四月六日 大本山高尾山薬王院中興第三十三世貫首 佐藤秀仁僧正の晋山式を執行致します

そこで王は弟を懲らしめようと思い、弟をたぶらかして宮中に閉じ込め、逃げ出さないように見張りを置くと、次のように言いました。「お前を七日間だけ国王の位に就かせよう。思う存分、欲を満たすが良い。ただし、七日後には殺すでしょう」と。弟は七日目が近づくとつれて胸が張り裂けそうになり、欲望を感じなくなっていました。むしろ、昼も夜も無常を心に念じ、寝食も忘れるほどに一心に仏道修行に励むようになったのです。阿育王はその様子を見ると、弟を許したのでした。（『沙石集』）

阿育王は弟に、この世のものは全て移り変わるという「無常」の道理を気づかせました。手荒い仕打ちをしたのも、弟を改心させるための荒療治だったのでしょう。阿育王は弟を憎んでいたわけではなく、日頃から慈しみの眼（好眼）で見つめていたからこそ、弟を仏様の道へと導いたのではないのでしょうか。お陰で弟の「悪眼」も「好眼」へと一変しています。

阿育王の慈悲の眼は、弟のみならず、清らかな眼を持つ息子や、周りの人々にも注がれていたでしょう。「眼施」の教えには、優しい温かな眼差しで人に接するということに加えて、無常のような仏様の教えを人々に伝えていくという教えも含まれているように思われます。



釈尊成道会厳修

十二月八日（水）

十二月八日、高尾山上の有喜苑仏舍利塔において、成道会が厳修されました。

お釈迦様が三十五歳の十二月八日に、菩提樹の下で悟りを開いて、仏陀（仏様）とされたことを成道といわれます。この尊い日には、毎年成道会という法要が営まれております。



総本山智積院 傳法大会 当山貫首臨監

十一月六日から十日まで、真言宗智山派総本山智積院において、布施浄慧化主猊下（写真前列）が真言宗長者に就任されたことを祝す、傳法大会が行われました。

傳法大会では、大本山成田山新勝寺の岸田照泰貫首（写真後列左）が総裁を、大本山川崎大師平間寺の藤田隆乘貫首（写真後列中央）と共に、当山の佐藤秀仁貫首が副総裁を務められました。

傳法大会とは、修行僧が真言宗の教義について問答を行うことで、教義の理解や解釈の度合いをはかるための法会です。



厄年を過ぎた

御信徒の皆様へ

六十才の厄年を過ぎたなら
一年一年を

七十才を過ぎたなら
暑さ、寒さを

八十才を過ぎたなら
春夏秋冬を

九十才を過ぎたなら
一日一日を

気を付けられ
日々を大切に

圓滿にお喜下さい

当山では皆様の

（身体健全
寿命長久）を祈念して

福壽圓滿の

御護摩を

お申し受け致しております。

いけばなの心 23

華道教授 佐藤 宗明

新年あけましておめで
とございます。

今年の水仙の生花か
らご紹介致します。池坊
では『陰の花、水仙に限
る』とも伝えられ、冬に
よく使われます。『金蓋
銀台』という言葉があり
ます。銀の台に乗る金の
盃、と言う意味ですが、
白い花弁を銀の台、黄色
い部分（副花冠）を金の
盃に見立てた水仙の異
称です。小さいながらも
香りも高く、美しい花を
見せてくれる水仙は陰の
季節（秋・冬）に春の兆
しを感じる希望だったの
かもしれません。

今回はその水仙を生
花正風体の『逆勝手』と
いう形で生けました。水
仙は葉がねじれながら
立ち上がります。生ける
時もねじれを活かす為、
葉の幅が大きく変化し

て見える事になります。
その空間の中に少しうっ
つき加減の花が入ること
で水仙独特の雰囲気
醸し出されています。
今回使用した花器は

『四海波』という銘がつい
ています。四海波とは中
国の詩や謡曲「高砂」の一
節にもありますが、『四
方の海が静か＝天下泰
平』を意味します。
今年も一年、八方丸く
収まり、世の中が穏やか
でありますよう、また皆
様にとって良い年であり
ますように。



花材：水仙

奉納御礼
大師堂に賽銭箱をご奉納頂く

十二月四日、大師堂前にお賽銭箱が奉納され、佐藤貫首御導師のもと奉納式が執り行われました。御奉納頂きましたのは、八王子市にお住まいの小池まり子様（写真左より三人目）です。小池様は大師堂前の賽銭箱の損傷が、著しい様子を御覧になったことから心を痛められ、奉納を発願されました。小池様は長年に渡って高尾山を信仰されており、現在でも月参りを続けられており、また御詠歌を学んでおられます。小池様には、重ねて御礼を申し上げます。



天狗面被い法要厳修

十二月十一日（土）

十二月十一日、JR高尾駅において、旅客安全、輸送安全、交通安全を祈る「天狗面被い法要」が執り行われました。

法要に先立ち、高尾駅の皆様をはじめ、高尾登山電鉄㈱、公益社団法人八王子観光コンベンション協会の職員の方々にもお手伝い頂き、一年の汚れを落とすため天狗面の清掃が行われました。法要に際しては、電車から降りられた方々が、合掌される姿も多く見受けられました。天狗像は昭和五十三年十月に完成し、高さ二、四メートル、重さ十八トン、巾十八メートルあり、山梨県産の白御影石を使用しております。



道行く人々を見守り続ける天狗面に感謝して清掃いたしました

観音菩薩の宗教

49

国際教養大学特任教授 金岡秀郎

観音菩薩の転生者としての聖徳太子 (その12)

前号までに見てきたように、聖徳太子薨去後の『聖徳太子傳曆(以下、傳曆)』『聖徳太子伝(以下、太子伝)』などの各種伝記によれば、聖徳太子は自らの過去世(前世)を知り、自分の転生者たちを語って聞かせている。それらの伝記は、太子がいくつもの輪廻転生を経て、現世たる飛鳥時代に生を享けたことを述べている。このように聖徳太子は前世を知る能力を持っていたが、それに加え自らの来世の姿をも知る超越的能力を有していたとされる。このことは、観音菩薩の転生者たる太子が自覚的に来世でもその功德を弘めたことを意味する。今号では、太子

による来世の予言について見てみたい。

後世の伝記に比べて『日本書紀』における聖徳太子は、神話的・伝説的要素は少ない。そこでは主に太子の文化的・政治的な事跡が伝えられている。『十七条憲法』と冠位十二階の制定や、遣唐使の派遣などがそれである。それでも『日本書紀』には、後に太子の神格化に展開して行くであろう超人的な能力の萌芽が見られる。先に見た「片岡山遊行説話」の工ピソドや、生まれてまもなく言葉話し、「豊聰耳」として優れた聴力を持つていたとすることはその例である(『観音菩薩の宗教』参照)。

『日本書紀』は太子の前世について触れておらず、太子が前世を知る能力を有していたとも記さないが、未来予知の異能については示唆的記述がある。『日本書紀』「推古天皇元年」に「及壯、一聞十人訴以勿失能辨、兼知未然」とあるのがそれである。その意は、「壮年になると、一度に十人の訴えを間違いない聞き、いまだに起きていないことを知ることができた」である。後半の「兼知未然(兼ねて未然を知る)」が未来の予知能力を指している。中世日本文学者の小峯和明によれば、『日本書紀』のこの記述は後世の『傳曆』や、聖徳太子が著したと仮託され、中世に多く現れた「未来記」に展開していくとされる(『予言文学の語る中世』聖徳太子未来記と野馬台詩)吉川弘文館、二〇一九年、七頁など)。

「未来記」とは一九七〇年代に日本で大ベストセラーとなった五島勉『ノストラダムスの大予言』(祥伝社、一九七三年)のごとく洋の東西や時代の今昔を問わず見られる未来の予言書で、科学的事実よりも思想的事実として大きな影響を与え続けてきた書籍群をいう。日本では中世を中心として、著者不明のものや聖徳太子が残したと信じられる「未来記」が発見されたといわれてきた。太平の世ですらひとは未来に不安を抱くとすれば、乱世、なかでも戦争の当事者であればなおさらであろう。室町時代の戦記文学『太平記』によれば、楠木正成は元弘二年(一三三二)、四天王寺に参詣し老僧より聖徳太子が書いたとされる「未来記」を見せられた。その文章を正成なりに解釈し、それにより彼の奉じる醍醐天皇の南朝方の勝利を確信したとされる(小峯和明『中世日本の予言書―未来記』を讀む)岩波新書、一五八

(一五九頁)。実体はまだ不明の点を残す聖徳太子の「未来記」に対し、『傳曆』や『太子伝』において太子が語る未来予知の文意は明解である。太子の未来の予言はすでに平安期の『傳曆』に見えるが、ここでは江戸・寛文期の『太子伝』所載の文を引用して検討してみよう。まず以下に見るのは、太子の平安遷都に関する予言である。十六歳の太子は物部氏を誅した後、四天王寺を建立するための材木を求め山城国愛宕郡折田の郷を訪ねたおり、こう述べた。

「この地の体を見るに、四神相応の靈地なり。未来の帝王の在所となるべし」(巻四、杉本校訂本、一六九頁)

意味を補って訳すと次のようになる。

に淵源する四方を護る神で、東の青龍、南の朱雀、西の白虎、北の玄武をいう。平安京も唐の長安城に倣い、四神に囲まれた都市設計がなされている。太子はこの後、さらに詳しくこの地に関する予言をした。原文と現代語訳を続いて示そう。

「杣山人、ならびに大臣諸卿、ともに木をきり、をのく、材木をとりければ、太子、『我も、きりてみる』とて、御守本尊の像をば、多羅の木に折り懸け給ひて、自ら斧をとりて、大木をきり給ふ。その鉞の音、山をひびかし、地をうごかす。数の材木をきりえて、様々、夕べにをよびければ、帰らんとおぼしめして、御守りを取り給へば、さらにもつて、はなれたまはず。その時に、太子、左右にかたつてのたまはく、

「我入滅のち、二百五十余歳をへて、これより南なる京を、此所へうつして、帝皇重ねて代を

「わたしが入滅したのち、二五〇年ほど経つて、ここより南にある(長岡京もしくは平城京)の都をこの(平安京)に移して、(そこで)代々天皇が(国を)治めて、仏法が世間に弘まると、(この都に)万民が来集して、(仏の)御利益は莫大なるう。それゆえに、この本尊の像を末代までの利益のために、ここに(このまま)お置き申し上げ、そういうなりゆきならば、ここに(本尊を)置いて、仏殿を一軒建立しよう」と大きな声でおっしゃった」

聖徳太子の入滅は六二二年、桓武天皇による平安遷都は七九四年であるから、上記の二五〇年後とすると計算が合わぬが、太子のこの予想は語り継がれ、四天王寺蔵の『聖徳太子絵伝』第四幅(一三三三年、重文)をはじめとする絵画にも描かれた。



聖徳太子が平安遷都を予言した地で斧を振るう『太子伝』の挿し絵(杉本好伸編『聖徳太子伝』国書刊行会、二〇二一年、一七一頁より)

「太子の持つていた)守り本尊の像を多羅の木にぶら下げて、自ら斧を取って大木をお切りになつた。その斧の音は山を響かせ、大地を動かした。多数の材木を切ることができ、次第に日暮れになつてきたので、帰ろうとお思いになつて、(先ほどの守り本尊の)お守りをお取りになろうとすると、(懸けた木から)お離れにならなかつた。その時に太子は左右の人々に向かつておっしゃった。

太子三十三歳の折りに、太子が未来に聖武

現代語訳、解説は次号に見たい。

健康登山者投稿作品

季節の絵手紙「美しいことば」

八王子市 栢谷 玲子 様

美しいことばのベストテン

- ①おはよう ナンバーワン
- ②ありがとう 世界中で一番すばらしいことば
- ③さようなら 忘れず知らないまに帰らないで
- ④はい 人に声かけられたらまずはいと
- ⑤いただきます 日本にしかない食前のことばと心
- ⑥すみません 素直にまずすみません 引いて互いに許し合ひましょう

一步一步煩惱滅除

百八の階段を昇り、悩みや煩い事を取り除きましょう

百八段 山を越えたらまた山があり

高尾山頂から見渡すと多くの山が聳えております。どんなことでも一つの区切りがつくと、次の目的に向かって動くものです。私たちは、楽しいこと辛いことに出合います。でも、そうした人生の方が面白いのかも知れません。

高尾山 季節散歩

暦の言葉 「七十二候」
水沢腹堅

「さわみずこおりつめる」
一月二十五日～一月二十九日頃
年間を通して一番寒い時期であり、沢の水が厚い氷となって張り詰める、という意味です。
日本最低気温もこの時期に観測されており、明治三十五年一月二十五日に北海道の旭川市で、マイナス四十一度が記録されました。

今月の風物詩
福笑い

福笑いの起源は詳しく分かっておりませんが、明治時代には、お正月の遊びとして定着したようです。
「おかめ」や「お多福」の輪郭を描いた紙の上に、目隠しをして眉・目・鼻・口などを置いていくゲームであり、出来上がった滑稽な姿を楽しみます。

折り折りの記 (149)

波多野 重雄

雪の降る高尾の山は神々しい

最近高尾山も雪が降らないが数年前の冬、大雪が降ったことがある。私は京王線高尾駅で下車し、誰も歩いていない国道を高尾山口まで歩き、誰も登った形跡のない一号路の坂道を木の間合いを見比べながら、道路の雪の高で見当をつけ、道幅の形の雪道を頼りにゆつくりと登った。
大木の「薬の木」も雪に頭を垂れ、猿園を過ぎ杉並木路は既に雪が掃かれていた。安堵して薬王院へ向かった記憶がある。あれから久しい。何となく春めき豆撒きも近い。
(高尾山健康登山の会会長)

雪山讃歌

西堀栄三郎
(漢訳・荒井一雄)

雪岩 我們 宿舍

我們 不可 住町

踏新 雪輝 朝日

今朝 登越 峰頂

むらさきの 厚木市 荒井一雄
天白き峰元朝こそ
永き願ひ叶へ努めれ

雪山讃歌

雪よ岩よ 我らが宿り

俺達や町には 住めないからに
俺達や町には 住めないからに
朝日にきらめく 新雪踏んで

きょうも行こうよ
あの嶺越えて

きょうも行こうよ
あの嶺越えて

高尾山 物語 45

有喜苑の供養碑・慰霊碑

絵・橋本豊治



東日本大震災物故者供養塔

有喜苑には、東日本大震災で犠牲となられた方々の冥福を祈る供養塔が建立されており、供養塔内には亡くなられた方々の名前が記された、犠牲者名簿が供えられております。

有喜苑の北側には、太平洋戦争に関わる供養碑や慰霊碑などが数多く建立されております。シベリア抑留者供養碑

太平洋戦争後、シベリア抑留により命を落とした兵士供養のため、平成二十二年に建立された。

満蒙大陸林業人供養塔

中国大陸で林業に携わり、現地で亡くなられた方々の冥福を祈るため、昭和四十九年に建立された。硫黄島戦没者慰霊碑

太平洋戦争で激戦となった硫黄島での戦没者の慰霊の為、昭和四十六年に建立された。

支那駐屯歩兵第二聯隊 慰霊顕彰碑

太平洋戦争などの様々な作戦に参加した兵士を慰霊するため、昭和五十五年に建立された。

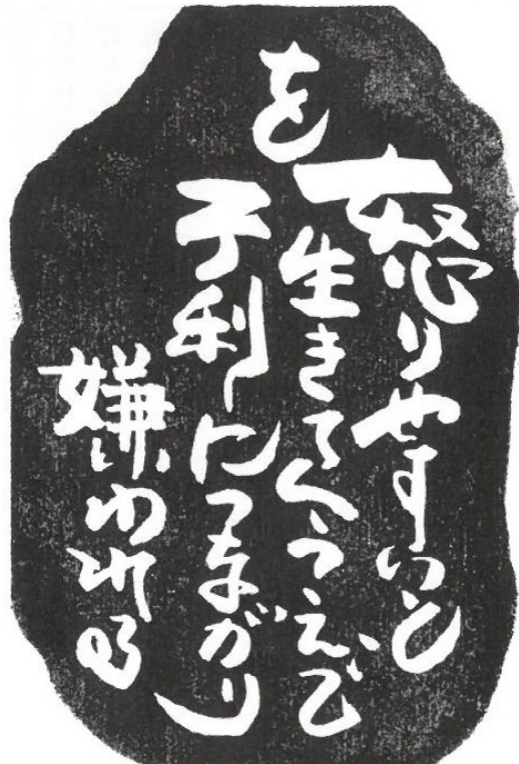
追悼の観音像

陸軍士官学校第六十一期生会、陸軍軍官学校第七期生会、陸軍経理学校第十期生会が同期生の追悼供養のため平成十五年に建立された。

いろは

天狗の落し文

12



を

怒りやすくと生きてくうえで 不利につながり嫌われる

どうしても腹が立ち、つい怒ってしまうことは人間誰しもあることです。ですが、怒る前に一呼吸置き、冷静になるべきです。
自分の感情を直接他人に示しても、相手にも感情があるので、簡単には理解してもらえず、結果として疎遠になってしまいます。結果として、他人の立場を尊重し、また逆に自分の憤りの原因を理解してもらえよう、落ち着いて対応していけるよう努めたいものです。

高尾山年代記

歴代山主の事跡をたどる

明治大学博物館 外山 徹

25

十四世秀永2 居開帳と護摩檀家

元禄二五年(一七〇二)に常法談所が復興されたが、その免許状の写しには願いの経緯として、延宝五年(一六七七)の火災からの伽藍復興が記されていた。

居開帳の執行

さて、祭祀の中心であった薬師堂が焼失した延宝の火災は相当な被害であったようだが、仁王門の仁王像再興が貞享元年(一六八四)と判明していることから、復興の優先順からしてもこの頃には伽藍の再整備がほぼ成っていたものと考えられる。その後、山主が堯永、賢俊、秀永と代替わりする間、高尾山信仰の様相が知れる同時代の史料には恵まれないが、後世の記事か

らその発展の状況を探ってみよう。

常法談所復興の翌々年元禄一七年(一七〇二)には居開帳が執行されたという。一八世紀の半ばには、近隣の旧家の日記に「高尾開帳参詣たくさん」(宝暦五年三月一五日)、「おびただしき高尾参り」(同年三月二日)と記されるように、本尊を公開して結縁の機会とする開帳は、大勢の参詣者を集めた。包紙に「当山靈宝目錄也并・開帳年度年月・御朱印頂戴之年月」と記された書付があり、年欠であるが、記事の内容はこの元禄一七年の居開帳が最も新しく、そこからさほど遠くない時期の作成と推測される。書面には、天正四年(一五七六)、慶

長一三年(一六〇八)、寛永一七年(一六四〇)、寛文二年(一六七二)と居開帳の執行年が記されている。この内、天正四年については前年十一月付の北条氏照が開帳場における乱暴狼藉を禁じた制札が残るので、制札発給の時期からして翌春に居開帳が予定されていたことは確実視される。江戸期において、寺社の出開帳は三三年以上(数えなので前回実施から三二年目となる)の間隔を開けるよう幕府から規制を受けていた。高尾山が荒廃していたと推測される慶長の頃はともかく、寛永・寛文の頃には執行があつてもおかしくないが、前記の年次は元禄一七年からさかのぼってピタリと三三年周期となっており、かえって不自然さを感じる。

元禄の居開帳については前年一〇月二七日に、二月二四日から六月五日までの百日間の開帳を永井伊賀守・阿部飛騨守・本田弾正少弼から免許された

と記されている。永井直敬・阿部正喬・本多忠晴は実際にその時期寺社奉行に就いており、願い書の写しは残存していないが、記事の詳細さから相応の信憑性を感じられる。

また、制札の残存から確実視できたであろう天正四年からちょうど三三年周期となるのが、元禄一七年における開帳実施の動機であつたとも考えられなくはない。元禄期は江戸でも盛んに各地の寺社が出開帳を執行した時期でもあるので、高尾山にて居開帳が執行されていても違和感はない。

この時期の出開帳として特筆すべきは、元禄一六年(一七〇三)四、六月に深川永代寺において執行された成田不動初の江戸出開帳である。森田座で初代市川団十郎が子授けの霊験をテーマとする「成田山分身不動」を上演し、当代きつての名役者による宣伝効果は大きく、大勢の参詣者を集めた。同じ年には上野国(群馬

県)新田の明王院、鎌倉の花蔵院、前の年には芝高輪台(東京都港区)の知行院、翌年には上総国高柳村(千葉県木更津市)護国寺、武蔵国不動岡村(埼玉県加須市)惣願寺と、この時期江戸では不動明王の出開帳がブームとも言うべき活況を呈していた。不動明王を本地とする飯縄大権現を祭祀する高尾山が、これに触発されて居開帳の執行を決めたとしても不思議ではないだろう。

護摩檀家の発生

この元禄一七年という年が重要な意味を持つのは、その年、江戸に記録上最初の永代護摩檀家が確認されることである。

薬王院文書の中には「永代日護摩家名記」という檀家帳が伝わっている。帳簿後段の分析から、名前の記された人物は密教の修法である護摩供の永代施主として護摩札の配札を受けていたことがわかつてい

には、

江戸神田鍋町

一、水嶋小左衛門
八王子八日市町

一、山上善左衛門母

江戸下谷

一、野田弁五郎明喬

江戸下谷

一、大塚安左衛門斯保

従元禄十七甲申年四月

江戸下谷

一、森山又四郎秀隆

従元禄十七甲申年五月

という名が見える。

居住地と、四人目大塚以降は施主となつた年次が書かれているので、高尾山の護摩檀家の分布状況を年代的な推移とともに知ることができる貴重な史料である。

この年をはじめ、初期の檀家には江戸在住者が多い。また、何れもが苗字か屋号を名乗り、前記の野田、大塚、河合、森山は諱名が記されているので武士なのだろう。居住地の「下谷」は現行地

名としては上野駅の北側だが、当時はもつと南側、現在の御徒町駅界隈である。つまり、「御徒士」は下級の御家人が集住する地区であり、彼らの素性が推測される。

注目したいのは、大塚、河合、森山の年次である。先の居開帳の実施時期にちょうど重なってくる。帳簿後段の記載によると、永代護摩檀家となる契機は参詣時の護摩料納入であり、すなわち、大塚らは開帳の際に高尾山を訪れていた可能性が

そうだとすれば、高尾山の開帳執行はあらかじめ江戸の人々にも伝わっていたことになる。この説は元禄一七年の開帳自体が同時期の史料に裏付けられない点に弱みがあるが、開帳の記事と檀家帳の年次の一致は偶然ではないように思われる。

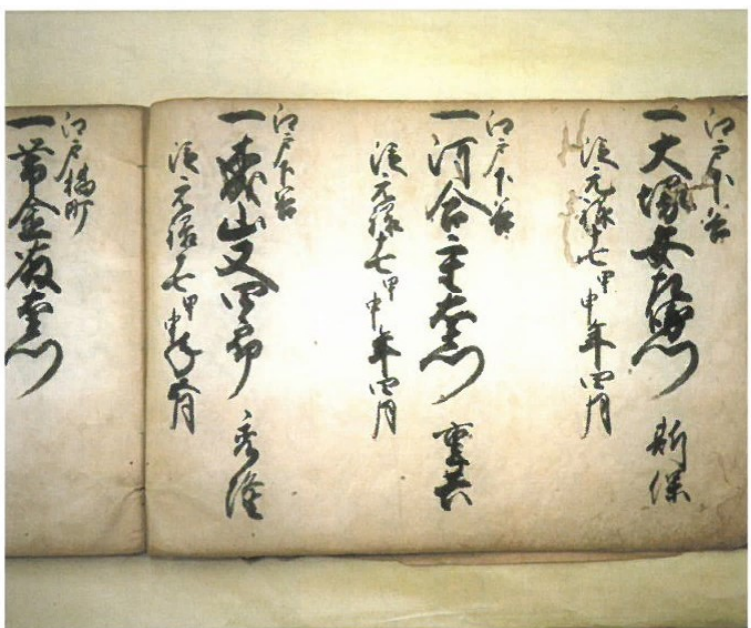
以降、この檀家帳では元禄一七年の六名を最多とし享保六年(一七二二)にかけて隔年くらいのペースで二、三名の江戸在住者

の名が記され、その中には(三井)越後屋八郎右衛門や松阪商人の小津孫太夫(木綿問屋)の名も見える。江戸中期の記事になるが永代護摩檀家となるには二両の護摩料が判明するので、施主となるのは一定程度の富裕層に限られたものと考えられる。

この檀家帳の成立もまた、筆跡から享保二年(一七二七)に作成され、以後書き継がれたもので、元禄一七年からは一三年のギャップがあり、実証という点では留保付である。

所得の発生や文化的営為の先進性という観点から、当初、江戸に護摩檀家が発生すること自体不自然ではない。

この居開帳の執行と護摩檀家の発生からは、人々の寺社参詣への機運が高まりを見せた時代に、高尾山もまたその選択肢として名を知られるようになったことが推察される。そして、この一四世秀永の時代、高尾山の歴史はその発展の様子が細部まで



檀家名の脇に元禄17年の年次が見える。「永代日護摩家名記」法政大学多摩図書館寄託

明らかにするのである。

《参考文献》比留間尚「江戸開帳年表」(西山松之助編『江戸町人の研究第二巻』吉川弘文館、一九七三)

おことわり 本連載では史料の引用について、読みやすく原文に手を加えています。

新たな年の安寧を祈る 正月限定 新春特別祈祷札

令和四年も正月期間（一月一日～一月三十一日）限定で「令和新春特別祈祷札」を授与致します。

近年は自然災害や疫病の流行等、様々な災厄が頻発する時代であります。しかしながら、年が改まり、心機一転する正月を迎えるにあたり、種々の災いが少ない、明るい一年となるようにと、特に御祈願申し上げる次第であります。御信徒の皆様方におかれましては、この機会に是非御来山を頂き、新たな年の安寧を共に祈り下さいますようお願いいたします。

ご祈祷料は一体三萬円となります。

願意（お願ひ事）は「除災開運」のみとなります。

御来山当日のお申込みも可能ですが、正月期間の御護摩受付所は混雑が予想されるため、事前のお申し込み込みも頂きます。また、御信徒様各位の御都合により高尾山へ御来山頂けない方の為に郵送でのお取り扱ひもいたしておりますので、ご希望の方は手紙・FAX・メールにてご連絡ください。



お問い合わせ先

電話 042-661-1115
FAX 042-664-1199
メール shinto@takaosan.or.jp

高尾山の昆虫

マルタンヤンマ

高尾山に生息するヤンマたちを、これまで何回かに分けてご紹介して参りました。

そのどれもが造形が素晴らしく、体色も美しいものばかりですが、そんなヤンマの中で敢えてどうしても一番綺麗なのを選びたいと言われましたら、今回取り上げるマルタンヤンマの名を挙げると思っています。

この奇妙な響きがあるマルタンという和名は、フランスのトンボ学者のR. Martinに献名されたことによるもので、見た目の印象で和名が付いた他のヤンマとは異なります。

本種は平地から丘陵にかけて見られますが少なく、東京都のレッドデータブックで、準絶滅危惧種に指定されています。

寿命が長いヤンマの仲間成熟度により色彩が変化しますが、本種は未成熟だとオスメス共に褐色がかりやや地味な感じですが、成熟するとオスの複眼や胸部、腰の斑紋は鮮やかなコバルトブルーを帯び、翅も褐色が強くなり、メスの方の複眼は褐色で成熟すると、胸部や腰の斑紋は目立つ浅葱色になり、オス以上に翅は褐色を帯びます。

黄昏飛行をする本種に出会うには、時期と時刻そして場所の選定が重要で、その努力が報われた時に最高のヤンマが鮮やかに降臨すると思えます。

（文松島 孝 撮影沼田 健次）



おはなし散歩道 だるまの願い

柏市 木村 研

大ちゃんが年賀状を書いていると、いきなり本箱の上のだるまが、「そろそろ、もう一つの目を書いておくれよ」と、言い出した。

「だめだよ。願かけしたんだから。願ひごとが叶ってからじゃないと」「そうか」

だるまは、大ちゃんとおじいちゃんが今年の正月初詣の帰りに、だるま市に寄ってくれた日のことを思い出した。

「ほんとに、そんな小さいだるまでいいの？」

おじいちゃんが何度も聞いたのに「これがい」「って、大ちゃんがぼくを買ってくれたんだ。その夜。「たこあげ大会で優勝しますように」って、願いをこめて、片方の目を書いてくれたんだ。そうだよね。

「困るよ。ほんとに困るんだから」

だから、それからずっと片目なんだ。でも、もうすぐお正月になるんだらう。ぼく、また神社に帰らなくちゃいけないんだ。だるまは「願ひって、いつ叶うの？」と。大ちゃんを見た。「ごめんね。たこあげ大会、明日なんだけど。たこも作ってないから無理だよ」

大ちゃんが、申し訳なきそうにいった。「困るよ。ほんとに困るんだから」

だるまは、片目をくくる回して、「そうだ。おじいちゃんに相談しようよ」と、いった。

大ちゃんとだるまがおじいちゃんに相談に行くこと「たこなら得意中の得意さ。よし、まかし

ときな。今から作ろう」と、一緒にたこを作ってくれた。おじいちゃんのは、竹や和紙で作る「角だこ」なんだ。

大ちゃんは、最後にぼくの絵を描いてくれたんだ。もちろん、目玉が二つあるだるまをね。

次の日、大ちゃんとおじいちゃんは、ぼくのたこを持って「たこあげ大会」に参加したんだ。

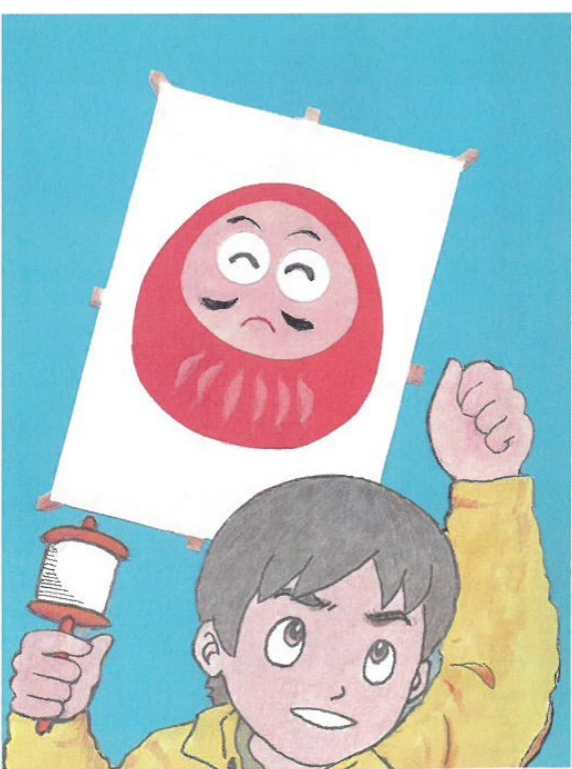
そして、一斉にたこあげが始まった。

「糸をひけ。そうだ。風を捕まえたぞ。そのまま糸をゆるめる。そうだ。今度は糸をひけ」

おじいちゃんのアドバイスどおりやっていると、たこは空から引っ張られるようにどんどん空に上がっていった。そして、とうとう糸がなくなってしまう。

それでもたこは、どんな空にのぼって、プツンと、糸が切れてしまった。

「わあああ」
タコは、くるくる回り



ながら、高尾のお山より高くてかく飛んで行ってしまった。

「残念だったなあ」
おじいちゃんが、申し訳なきそうにいった。「しょうがないよ。でも、あんなによく飛んだんだから」

大ちゃんもいった。「だるまは失格になつて願ひはかなわなかったけどいい気分だった。願ひが叶わなかったら、どうなるの？」

だるまが困ったように聞くと、おじいちゃんは、「そうよなあ。願ひが叶わなかったときは、同じ

大ききのだるまを買って、もう一度願掛けすればいいんだよ」と、いった。「そうか」

「今度、ぜったい優勝するからな」と、だるまの残った目を真っ黒く塗りつぶして眼帯にしてくれた。

初詣に行った日、大ちゃんはおじいちゃんと眼帯を着けただるまを返しに行つて、新しいだるまを買ってきた。

（おわり）
（挿し絵・小出 茂）



令和四年 正月期間の御護摩修行の流れとお願い

当山の感染症防止対策について



【感染防止の基本】

- ・ 大本堂、各部署は常時換気を徹底しています
- ・ 境内各所は定期巡回を行い、消毒を実施致します
- ・ 消毒液の設置(手指の消毒にご協力をお願いします)
- ・ 事前の検温とマスク着用の徹底をお願いします
- ・ 体調が優れない時には外出をお控え下さい

【大本堂内での対策】

- ・ 靴袋をご持参下さい
- ・ 堂内での私語はお控え下さい
- ・ 堂内への入場は二百名までと制限します

【坊入りについて】

・ 例年、七日まで行っている新年の御挨拶(おとそ膳)は本年も中止と致します

【御護摩受付所・信徒休憩所】

- ・ 信徒休憩所は使用中と致します
- ・ 御朱印及び健康登山押印は御護摩受付所にて授与致します

※御参拝できない方には郵送にて、御護摩札、縁起物、御守り等を授与致します

御信徒の皆様にはご不便をお掛け致しますが、何卒御理解と御協力の程、宜しくお願い申し上げます
御質問等御座いましたら高尾山薬王院信徒部までご連絡をお願いします
尚、今後の感染状況により、対策等が変更になる場合があります

高尾山薬王院信徒部 TEL〇四二一六六一一一一五



令和四年 壬寅(みずのえとら) 高尾山節分会追儺式参加申込の御案内

二月三日(木)

歳男・歳女 修行時間

第一回	午前九時
第二回	午前十時半
第三回	正午
第四回	午後一時半
第五回	午後二時半

尚、修行時間の三十分前、もしくは、定員になり次第受付を締め切らせていただきます。もし時間に間に合わない場合は次回の修行時間にお入り頂きますので、何卒、ご了承下さいませ。

高尾山恒例の節分会(豆まき式)が、二月三日、身上安全、除災開運、災厄消除、福寿円満等の祈願をこめて開催されます。

御信徒の皆様には、歳男・歳女に参加されますようおすめいたします。

冥加料(祈祷料)三万円

お問い合わせ 高尾山節分会係
電話〇四二(六六一)一一一五

本年の開催方針及びご参加の皆様へお願い

本年の節分会につきましては、新型コロナウイルス感染症拡散防止対策を徹底した上で開催致します。

対策が出来ない宿泊や祝宴等の飲食、早朝五時の追儺式は昨年同様に中止とさせていただきます。

本堂は人数制限を行い、豆まきや永年参加者表彰式は開催致します。

皆様にはご不便をおかけ致しますが、ご理解ご協賛を賜り御参加下さいますようお願い申し上げます。

ご参加される方は、当日朝に検温して頂き、もし体調が優れない時やご不安な際には御来山をお控え頂き、ご連絡下さい。また、境内や本堂などの建物内、ケーブルカーや送迎車両に乘車される際には、マスクを着用の上、出来る限り会話をお控え下さいますようお願い申し上げます。

郵送御護摩申し込み受付について

高尾山では大本堂に於いて、毎日御護摩修行を行っております。遠方の御信徒や、参拝できない御信徒の皆様のために、御護摩札の郵送をお受けしております。

手紙、FAX等での申し込みをお願いしておりますが、「高尾山薬王院公式ホームページ」内の御護摩祈祷の御案内からインターネットにて、直接お申し込み頂くことが出来ますので、是非ご利用頂きますようお願い申し上げます。

お問い合わせ先 ☎〇四二一六六一一一一五 「郵送御護摩係」まで

院内散歩58

～薬王院の展示物～



「開運合格鉄蛸」
鉄作家 チャーリー磯崎 作

高尾山火渡り祭

(令和四年三月十三日 日曜日)

柴燈大護摩供御壇木特別志納御案内

當山では毎年三月第二日曜日に春を招く恒例行事として、祈禱殿火渡り本尊ご寶前にて、高尾山修験道による火渡り祭が盛大に執り行われます。火渡り祭とは、高尾山主導師のもと、全国各地の靈山で修行を重ねた山伏が、一心に諸願成就の祈りを捧げる、関東屈指の大祈禱法要であります。この浄行にあたり、御信徒の皆様方より柴燈大護摩供にて供される、御本尊・飯繩大権現様の功德を顕す御壇木のご志納を一本二万円にて募っております。ご信徒の皆様、並びにご講中の講員様方におかれましては、高尾山の浄行に大いなるご信託を賜りますよう、謹んでお願いを申し上げます。尚、ご志納の証として、ご芳名を薬王院参道に一年間掲示致します。御志納方法についての詳細は、高尾山薬王院信徒部までお問い合わせ下さい。

電話 〇四二六六六一二二五
FAX 〇四二六六四二九九
大本山 高尾山 薬王院 信徒部



祈大願成就 身体健全

高尾登

※今後、新型コロナウイルス感染症の流行状況等により、実施内容が急遽変更となる場合がありますこと、御承知おき下さい。

高尾山修行場めぐり

10

高尾山内八十八大師

高尾山には、「高尾山内八十八大師」という、お大師様の像が各所に建立されております。このお大師様の像は、明治三十六年(一九〇三)に、高尾山中興第二十六世貫首・志賀照林大僧正により建立されました。大僧正は、自ら四国八十八ヶ所を巡礼され、東国のご信徒の為に高尾山内を四国と見立て、八十八ヶ所の霊場の御砂を持ち帰り、山内の各所のお大師様の像の下に納められました。

初めてお参りされる方には、春秋に一回ずつ開催しております、薬王院の僧侶が案内する「高尾山内八十八大師めぐり」をお勧め申し上げます。



高尾山報助成金志納者御芳名(順不同・敬称略)

- List of donors including: 札幌市 阿部 フミ子, 熊谷市 大崎 正一, 八王子市 天野 章雄, etc.

火渡り祭「なで木」の功德

「なで木」とは御本尊様の大慈大悲の御手であり、年齢・氏名を御記入の上、健康な方は益々壮健であるように、お身に病の生じている方は、御本尊様を念じながら「なで木」でその患部を撫でさすり下さい。



火中に供されることで、身体健全・息災延命を祈念して御本尊様よりお加持を賜り、病魔を滅する御加護をいただきます。

お知らせ

高尾山では、御壇木御志納の申し込みを、お電話・ファックス等で受付けております。高尾山報の一月号に同封いたしました、郵便振替「払込取扱票」を利用してもお申し込み頂けますよう便宜を図りましたので、よろしくお申し込み申し上げます。「払込取扱票」でお申し込みを頂く際に、願意(お願い事)が未記入でご連絡がつかない場合、「身体健全」とさせて頂きます。また、火渡り祭の時に名前を読み上げますので、フリガナの記入もお願い致します。尚、「払込取扱票」は、高尾山報助成金の振替にもご利用いただけます。

訂正とお詫び

先月号十三ページに掲載いたしました「お話散歩道 わたしの役目」の筆者名を誤って明記しておりました。

(正)八王子市 池田 美絵 (誤)町田市 大澤 桃代 茲に謹んでお詫び申し上げます。

- 東村山市 池ヶ谷 益生, 日野市 大久保 博二, 八王子市 田中 邦宏, etc.



えとほりことら
干支張子・寅

作・中島 俊介 (札幌勤務)

謹賀新年

令和四年
壬寅(みずのえとら)
大本山 高尾山

- 春の行事**
- 初詣 迎光祭
新年特別開帳
大護摩供奉修
- 初甲子(福德大黒天祭)
一月十一日(火)
- 節分会(厄除開運の豆まき)
二月三日(木)
- 初午 (福德稻荷祭)
二月十日(木)
- 火渡り祭
三月十三日(日)
- 滝開き
四月一日(金)
- 花まつり(仏舎利塔)
四月八日(金)
- 春季大祭(稚児練行)
四月十七日(日)

—新春大護摩奉修特別時間—

	元日 (土)	2・3日 (日)・(月)	4~7日 (火)~(金)	11~14日 (火)~(金)	8・9・10日 15・16・23日 (土曜・日曜・祝日)	17日以降 (土曜・平日)	30日 (日)
午 前	0:00						
	1:30						
	3:00						
	4:30						
	6:00	6:00	6:00	6:00	6:00	6:00	6:00
	7:30	7:00					
午 後		8:00			8:00		
	9:00	9:00	9:00	9:00	9:00	9:30	9:00
	10:00	10:00	10:00	10:00	10:00		10:00
	11:00	11:00	11:00	11:00	11:00	11:00	11:00
午 後	0:00	0:00	0:00	0:00	0:00	0:30	0:30
	1:00	1:00	1:00	1:00	1:00		
	2:00	2:00	2:00	2:00	2:00	2:00	2:00
	3:00	3:00	3:30	3:30	3:30	3:30	3:30
	4:30	4:00					

★正月期間中は御護摩受付所や大本堂周辺は、大変混雑致します。

お昼前後の御護摩修行には大勢の御信徒様が集中することが予想されますので、密集を避けるためにも、時間を調整しての御来山をお勧めいたします。

二月行事日程

- 一日〜七日 聖天秘供(聖天堂)
- 九日、二十一日 弁天様御縁日
- 八日、二十八日 御詠歌勉強会
- 八日 (十時山麓不動院)
- 八日 仏舎利詣り(仏舎利塔)
- 二十一日 飯縄様御縁日
- 神徳報謝百味飲食供
- 二十六日 (九時大本堂) 月例写経会
- (十三時山麓不動院)
- 二十七日 高尾山とんとんむかし「語り部の会」
- (十二時半山麓不動院) 奥之院開扉法要
- (十時奥之院)

高尾山薬王院ホームページ
<https://www.takaosan.or.jp>

発行所
東京都八王子市高尾町2177
大本山
高尾山薬王院
郵便番号 193-8686
電話(042)-661-1115(代)
FAX(042)-664-1199
発行人 菅谷 秀文
編集人 菅井 倫浩
印刷 ヒラツカ印刷社
毎月1回1日発行
1部50円